

---

# (習作) 宝箱転生記～ミミックの生態～

インテグラル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

(習作) 宝箱転生記～ミリックの生態～

### 【Zコード】

Z9359Z

### 【作者名】 インテグラル

### 【あらすじ】

生前、病気によつて不幸な死を遂げた彼が次に目を覚ますと、そこは見知らぬ暗闇の石室だつた。誰もが知つてゐるがあまり人気では無さそうなアソツに転生した彼は、これからどうやって生きていくのか。これは、チキンな彼の宝箱転生記である。

初投稿の習作ですので、見苦しい文章になる可能性が高いです。更新速度も期待しないでいただきたいのですが…それでも良いとう方の暇つぶしにでもなれば幸いです。

カドのある人生、始めました。（前書き）

初めまして、インテグラルと申します。

今回は、練習作品として初投稿させてもらいます。

作者の文才はミジンコのうえ、更新速度もゾウリムシだと思われますが、それでも構わないという心優しい方の暇つぶしにでもなるといいな」と思っています。

## カドのある人生、始めました。

「彼」の意識は唐突に覚醒した。

(……ん、あれ、俺は……?)

ぼんやりとしたまま辺りを探る「彼」。

(確か、俺は病院のあのベッドの上で死んで……)

未だしつかりとした思考を構築出来ない「彼」は、ふわふわとした思考回路で自分の身の上を確認する。

「彼」には直前の死の記憶があった。

特別幸運でも不運でも無かつたはずの青年だった。

ごく普通に生まれ、育ち、不運なことにある致死の病に倒れてしまつ。

一般的に見れば不幸な人生だつたかもしれない。

しかし、「彼」はそこまで自分の人生と運を恨む事も無かつた。

そうなり得る可能性があればもつと生きたいとは思つただろう。

だが、そつはならなかつた今においても大した後悔はない。

彼のその人生観は、何事にも淡白だった彼の人格をよく表している。

(「…………」)

見知らぬ場所だった。

辺りは真っ暗であり、床が比較的平らな石で出来ていることから何らかの室内と考えられる。

部屋の奥にはアーチ状にくり抜かれた入り口がある。

(何でこんな場所にいるんだ?いや、それよりもなぜ一度途切れた意識が続いている?)

ちなみに、「彼」は死後の世界等の存在を一切信じていない。

そのような話が嫌いなわけではないが、まあ無いだろうな~というのが生前の「彼」の死に対する観念であった。

(おかしいぞ?なんだこの状況は?)

時間が経つに連れて思考ははつきりとし始め、今の異常な事態が理解出来るようになつてくる。

(俺は死んだ。…それは間違い無いよな?流石!)

(でも、意識がある。)

だんだんと不安になつてきた「彼」は、とりあえず周りの状況をもつとよく確かめてみることにする。

辺りが真っ暗なため、よくよく目を凝らし…

(あれ?)

目を凝らす?

今更ながらに自身の身体に起じた変化に気づく「彼」。

(こんな真っ暗な部屋で物を「見た」?)

それも、かつてとは比べ物にならないくらい詳細で鮮明で正確に。少し意識を広げれば、自身の周囲360度が視界に入った。

辺りには一切の光源が無いにも関わらず物が「見え」、知覚できる。明らかに異常だった。

そこで、「彼」はようやく自覚する。

(あれ?今の「俺」は人間なのか?)

自分の「手」を眼前…いや、全方位が眼前とも言えるのだがとにかく持ち上げてみる。

目に映つたのは、くねくねと自在に動く一本の触手。

(……は?)

「彼」は、自分の目で見たものが信じられず、反射的に目をこすり

うとした。

(…………。)

触手が近づいて来て、左右に頬り無く揺れる。

(…は？え？何これ？)

今度は、自分の身体を手（触手）で触つてみようとしたのだが……

（え、硬つた！？何だよこれ、木製？）

「彼」の感覚的に自分の身体があるはずの場所に鎮座していたのは木の箱だった。

上面が引き上げ蓋になつていて、今動かしている触手もその隙間から伸びてこる……よつた。

とりあえず、「彼」は自分の身体をペタペタと触りまくる。

（いやいや、身體が箱（木製）つておかしいだろ生物として。）

しかし、調べれば調べるほど箱である。

縦60㌢、横80㌢、高さ70㌢くらいのなかなか大きくて立派な木箱のようだ。

表面からは木目の感触がある。

（はあ…。いくら確かめても箱は無くならないよな。それじゃあ、

中を調べてみるか。 )

「彼」の意志に従い、触手が箱の蓋付近…つまり触手自体の根本でもあるわけだが、その隙間に近づいていく。

スルリと隙間から侵入した触手は、箱の内側を探り、そして大きすぎる違和感にピタリと動きを止めた。

箱は、慎重に伸ばされた触手をほぼ全て飲み込んだ。

深さ70cm程度の箱が、長さ1m程の触手をやすやすと受け入れたのだ。

触手を伸ばしたままで。

(ー?…おかしい、箱の深さは触手の長さより少しあったはず。 )

だが、現実に箱の中はいくら触手を振り回しても壁に当たる気配はなく、それどころかどこまでも続いているような得体の知れない巨大さを感じさせた。

(この中…こや、今は俺の中、か。とにかく、まともな空間ではない。明らかに何か異常な空間につながっている気がする。 )

(ん?…までよ、何かこんな化け物がいた気がするな。箱の身体…触手…異空間につながる入り口…。 )

(箱の中に隠れていって、触手で他の生物を捕まえ、口を開ければ無限の胃袋…つて、あ。 )

(まさか、アレか？…いやいやそれは無いだろ。 )

(こへり句でも…まさか、なあ。 )

(でも、今のところ手に入った情報が当てはまる生物が一つしか思い浮かばないんだよなあ？)

そこまで考えた「彼」は、ふと思考の海から抜け出ると、相変わらず静かな闇が埋め尽くす眼前に向かつてそつと呟いた。

(…やはり、////ック、か。 )

////ックに发声器官はありません。  
呟いたつもり、というのが正確です。

こうして、「彼」の新たな宝箱人生…いや、初めての箱生が始まつたのだった。

# # # # #

始まつたのだったが。

(まいつたな…////ックの生態なんて想像も出来ないんだが。 )

なにせ、宝箱の中から触手が生えているだけの謎生物である。

普段何をしているのか、とか、主に何を食べているのか、とか、疑問は尽きない。

……////シクつて、あらゆる生物の中で一番生態が謎な生物なんじやなかろううか。

そんな事を考えていた彼だったが、とりあえず移動する事にした。

何事も、自分で動いて情報を集めるのが「彼」の主義だった。

立ち上がりつとじて……

(あれ？////シクつて、呪無こよな。)

…………。

(え、嘘、まさかの移動不可能！？)

と、ここで「彼」は外見上唯一自分とただの宝箱を区別する存在に気づく。

(や、そつだ、触手があるじゃないか。)

触手を先の方の地面に押し付け、身体兼宝箱を引きずりつとじて、「彼」は愕然とした。

(この触手……意外と非力だ……。)

ずつずつと人であった頃の歩みよりだいぶ遅い速度で身体が進む。

もともと一定個所に止まって餌をはる（というイメージの）生物であるためか、移動能力はやたらと低いらしい。

ズリズリ

ズリズリ：

ズリズリ

ズリズリ

ズ  
リ  
:

2

3

めぐらしき

驚愕の鈍足だつた。

(え、何、俺はこれからこのスピードで生きていかなかんの！？)

思わず関西弁になるくらいのショックだったようだ。

その時だつた。

ウ　ス　ス　オ　ス　ス　ス　。

妙な声が聞こえた。

人間の呻きのような、それにこじては音程が低すぎる奇妙で不気味な重音。

「彼」…以後ミミック…は、その奇妙な音にピタリと動きを止めた。

恐る恐る辺りをつかがつ。

(何かいるのか?)

五感を全開にして情報を拾おうとする。

そして…

(これは…足音?)

微かに足音ひしがれを捉えた。

少々乱れ氣味ではあるが、一足歩行をしているような気がする。

だんだん近づいてくる。

(マズ!マズ!マズ!…もう近くにいるぞ。)

アーチ状の部屋の入り口まで到達していったミミックは、全速力で部屋の奥に逃げ戻ろうとするが…

(ギヤー…全然進まないーーーー)

足音はゆっくりと近づいて来る。

（……も、もち着け……じゃない落ち着け、俺。あの足音が何も敵とは限らないだろ、道に迷つて困つてる美少女かも知れない。）

既に、足音ははつきりと聞こえるようになつてゐる。

ビタッ…ズルッ…ビタンッ…ベタッ…

（……そ、そうとも。きつと可憐な女の子を…。ちよつと千鳥足だけど。）

ビタッ！ズルッ…ベタンッ！

（ギヤー…やつぱ怖い！俺も化け物だけビホントに怖い！…ってあ、ミミックじやん、俺。）

ミミックは、触手を箱にしまつと蓋を開じ、「僕、ただの箱だよ？」形態に移行した。

専門なだけあり、その姿はどこから見てもただの箱、ちよつと古ぼけた木箱が打ち捨てられていくようにしか見えない。

（よ、よし。これで安全だらう。）

とりあえずやれることをやつたミミックは、足音に意識を集中する。

謎の足音は、もうすぐやつた。

ビタッ…ズルッ…ベタ…ビタッ…ビタッ…

( ..... 。 )

ズルツ　ベタ　ビタツ　ビタツ　ビタツ　ビタツ

( ..... ブルツ。 )

ビタツ　ビタツ　ベタ　ベタ　ビタツ

足音は、ついでにシックのいる石室の入り口に達した。

( 来るな来るな来るな来るなあーーー )

シックの祈りも虚しく、足音の主はゆっくりと顔を覗かせる。

それは.....

流れる金髪。

真っ白な肌。

抜群のプロポーション。

( 美少女だったーーー。 されば、タイプだったかもしれないな。 )

白由をむいて、腹から腸を引きずつてなければだが。

左手もとれそうだし。

口元には派手な血化粧が。

(「どう見てもゾンビ」です本当にありがとうございました。)

「うへ～～～～～オ～？」

(「じちに興味持つたあーーーー。」)

ふらふらと近づいて来るゾンビ(※分)。

(怖えーーー何このリアルバイ　ハザードーー?)

主人公が箱のバイ　ハザードなんて聞いたこと無いけど。

ついに田の前に立つたゾンビ(確定)。

腐り始めた両手が箱にかけられ…

(え? ちょっと… なんで開けよとしてんの! ? ゾンビにそんな知恵  
があるわけ… ちょっと、やめ、開けないでーーー。)

開けられた。

だが、それだけだった。

蓋を開けたゾンビは、そのまま立ち去りし箱の中に虚ろな視線を落  
とすのみである。

(もしかして、ゾンビはミックは襲わないのか?)

あり得る話ではある。

///シクを襲つたゾンビが得るものなんて木片くらいだと思われる事であるし。

勇気が出た///シクは、ゾンビの目の前で触手を振つてみた。

フリフリ。

(何の反応も無いな。)

と。

突然ゾンビが触手を捕まえると、口をあんぐり開いてその中へ…

(つてせせるかーーー！)

慌てた///シクは、触手を箱の中にしまった。

…じつかりと触手を握り締めたゾンビ」と。

///シクの箱の中に広がる不思議空間は、明らかに自分より大きいゾンビをやすやすと飲み込んでしまった。

(…あれ、え?)

(や、ゾンビ食つまつたーーー！)

…前途多難であった。



腹……壊さないよね……？

「ウ~~~~~ア~~~~~」

暗闇に包まれた石の通路をふらふらと歩きまわるモノがあった。

腐りかけの身体を重そうに引きずつて歩く、生き続ける死者。

「リビングデッド」と呼ばれるモンスターだ。

世界に満ちる神秘のエネルギーである「魔素」、その密度が高い場所に放置された死体は、魔力にあてられ仮初めの命を取り戻す。

「ウ~~~~~」

危なつかしい足取りで石の冷たい通路を進むリビングデッド。

ふと、リビングデッドは何かを見つけたようだ。

わざわざまでのたださ迷うだけの足取りと違い、明確にどこかを田指して足を進め始めた。

……それでもやっぱりふらふらしているのだが。

とにかく、何が興味を引く物を発見したらしきリビングデッドは、あっけへふらふらこっちへふらふら通路を進む。

田指した先には、木箱が一つ鎮座していた。

50メートルを30秒もかけて箱にたどり着いたリビングテッドは、見たところただの木箱であるそれに興味津々で顔を寄せた。

すると……

ガバッ！

シュルルル

グイッ

バタン！

…………。

あつと言つ間の早業だった。

変化は一瞬、次の瞬間には先程までとならぬ静かな世界が広がっていた。

さつままでいたリビングテッドの姿が無い事を除いて、だ。

木箱は、ひとりでに蓋を開けたとおもつと一瞬の早業でリビングテッドを触手に巻き取り、箱の中へ引きずり込んでしまったのだった。

……」の、どう見てもホラー映画の化け物役みたのがこの物語の主人公である。

(?何か悪口言われたよくな...)

氣のせいです。

とにかく、「彼」がミミックに生まれ変わってから3ヶ月が経過していた。

もともとの人間であつた「彼」がこんな空間に3ヶ月もいたら発狂していたらうが、今の「彼」はミミックである。

むしろ、暗くて狭い場所は大好きであつたりした。

この3ヶ月、ミミックは積極的に獲物（大体リビングデッド。）を捕食？している。

当然、理由がある。

（今ので10匹は食べた。そろそろか…？）

突然、空間に半透明に輝く文字が浮かんだ。

ICongratulations!!!

ーリビングデッド」▼5（11）の吸収でレベルが上がりました。  
スキルレベルが上がりました。ー

—ミミックロード」▼18 ▼19—

ースキル「誘引」 Lv5 Lv6—

これである。

ミミックは、というより全てのモンスターなのだろうが、他のモンスターを殺すと何らかの力が蓄積され、一定値貯まるレベルアップの通知があるので。

ゲームみたいな不可思議なシステムであるが、特に害もないためそういう物なのだとミミックは納得していた。

一つくらいではわかり辛いが、三つもレベルが上がると確かに自分の違いがはっきりとわかる。

以前よりも触手の力が増し、周りの知覚範囲も格段に広がった。

…それでもやつぱり鈍足ではあるが、こればかりは仕方がない事だろ。ひ。

いくらレベルが上昇しても、本来自分が得意としていない事はやっぱり得意では無いのだった。

そもそもミミックの身体構造的に考えても、獲物の近くまで行ったら後は騙しておびき寄せてひと呑みのほうが効率がいいこともあるし。

(いやー、しかしもうレベル19か。最初はただのミミックLV1で焦ったよなー。)

今の//ミックは、レベル1-2で進化して//ミックロードである。

…既にこの呼び方は//ミックのままとさせていただく。

(しかし…//ミックロードに進化しても外見上変化がほとんど無くて悲しいよな。)

箱がちょっと立派になりました。

余談ではあるが、この世界において//ミックというモンスターが//ミックロードに到達する事は稀である。

自分からアピールしない限りモンスターが//ミックにてり事は少なく、通常の//ミックといえば運が良くてもレベルが1上がるのに数十年の間日を必要とするのだ。

大抵の//ミックは、レベル1-0になる前に格上のモンスターに破壊されてしまうのだが。

ただし、生きているモンスターを丸呑みにするといつ攻撃は、相手の力を全て吸収するという利点があるために獲物さえ豊富ならば凄まじい勢いで成長する可能性も秘めている。

そして、現在の「彼」こと//ミックがその状態なのだつた。

(あ～、ようやくレベル1-9か。まだまだ先は長いな。)

既に//ミック系モンスターとしては規格外のレベルに達しつつある

///シクだが、まだまだ上に行くなつてある。

(セド、次の獲物を探すか~)

そつし〜///シクは、ズルズルと亀の歩みで闇の奥に消えてゆくのであつた。

/ / / / /

ヅ――――――ン――――!

(ー? )

ある日のこと、いつも通りにリビングテッドを捕まえていた///シクは、とてもない衝撃を感じした。

何かが壁に叩きつけられたような鈍い打撃音と巨大な衝撃に辺りがぐらぐらと揺れる。

(何だー? こんな事初めてだぞー? )

今まで///シクが出会ったのはリビングテッドと他の///シクだけである。

(意外と近いな… ょし、こいつを見に行け。 )

ミミックは、ズルズルと移動を開始した。

相変わらず移動に関しては役立たずの触手を使い、暗い通路をノロノロと進む。

ドタバタギャーギャー大音響を響かせている原因の場所は既に日星をつけている。

ドオ――――――ン――――――

再び辺りが大きく揺れた。

何が起こっているのやら…。

ミミックが現場に到着したとき、ちょうど決着が着く瞬間だった。

初めて見る巨大なドラゴンと、いかにも禍々しい気配を纏った鎧の騎士が戦っていたのだ。

この石造りの迷宮は、基本的には狭い通路と石室で構成されているが、今眼前に広がる空間だけはやたらと広いホールになっていた。

勿論、ミミックも既に訪れたことはあったが、ただ広いだけであり、獲物がなかなか自分に気づかないというデメリットしか無かつたため一度来たきりだったのだ。

全長7、8メートルはあるだろ?ダークレッドのドラゴンと、禍々しい黒い鎧の騎士、戦いは騎士の劣勢だった。

騎士は、手に持つ明らかに呪われている感じの剣を振る。ドリゴンに浅く無い傷を刻みつけしていくが、ドリゴンはその皿体を武器に騎士を吹き飛ばし叩きつけ躊躇する。

ギヤオオオオオツ——————！

ドリゴンの鳴き声と共に//シクの皿の前で黒騎士が壁に呑めつけられた。

ドリゴンの方も軽くないダメージのようで、足がふらつこっているが、黒騎士は既に立つことも厳しそうだ。

ガシャガシャと鎧を鳴らすが立ち上がる気配は無い。

やがてその動きも緩慢になると、僅かに剣を持ち上げてドリゴンに向けたまま動かなくなつた。

わざまでの騒音から、一転して静まり返る場。

黒騎士はドリゴンに剣を向けたまま静止し、ドリゴンはフランフランながら黒騎士を睨み付けて臨戦態勢、//シクせビビツながら箱の中に閉じこもつた。

緊張が高まり、爆発するかに思われたその時…

ドリゴンがくるつと顔を向けた。

小さく鳴くと奥の暗闇に消えてゆく

デラゴンの後ろ姿が完全に消えると、黒騎士はガシャリと剣を下ろした。

そういう消耗しているようで、もう動く事が出来ないようだ。

黒騎士に興味を持つた//ミックは、そろそろと近づいてみる。

5メートル

4メートル

3メートル

2メートル

1メートル

(//)まで約5分経過。遅い。 )

至近距離で黒騎士の顔の部分を覗き込む。

( ?中が無い? )

倒れてなお禍々しい気配を放つ鎧の中身は空のようだ。

( わういうモンスターなのか?…まあ、//ミックがいるんだし空の鎧がいても不思議じゃないよな。 )

そんなことを思いながら黒騎士を触手でつつこてみよつとした瞬間…

ガシャー！！

(ギヤーーー！)

突如として黒騎士が再稼働し、ミミックの触手を握り締めたのだ。

ミミックは必死に触手を引っ張るが、弱つていてはいえドラゴンと1対1が出来るような超高レベルモンスターと勝負になるはずもなく。

(ギヤーー離せーー！)

全力で触手を引っ張り続ける。

だが、相手は微動だにせず、むしろミミックがだんだん黒騎士に引き寄せられていた。

そしてついに……

ミミックを鬱陶しく思つたのか、黒騎士は握り締めたミミックの触手を凄まじい力で引いた。

その力に抗しきれるわけもないミミックは宙を舞う。

ふわりと浮いたミミックは、勢い良く黒騎士に引きずり寄せられ、そのまま叩きつけられ……

る直前に大きく箱の口を開いた。

それが本能的な行動なのか、悲鳴でもあげよつとしたのかは定かでない。

が、結果的にとんでもない事が起こった。

大きく開いた//シクの口は、黒騎士の頭部にかぶさり……そのまま呑み込んだ。

少し遅れて全身が呑み込まれていく。

数秒後には、//シクだけが残っていた。

(え？ 嘘？……ぐ、食っちまつたー！？)

(相手の方が大分レベル高かつたはずだけど大丈夫だよな？突然口から手が出てきたりしないよな！？)

—Congratulations! —

—ナイトメア・ナイトアーマー Lv89 (1) の吸収でレベルが上がりました。 —

— Lv28に達したため、進化が可能です。 —

— 進化がキャンセルされました。 —

—LV40に達したため、進化が可能です。—

—進化がキャンセルされました。—

—LV62に達したため、進化が可能です。—

—進化系統を選択してください。—

—パンドラ—LV62

選択条件 レベル62に到達。

—リベリオンボックス—LV62

選択条件 レベル62に到達。

自分より10以上高いレベルのモンスターを倒す。

—スローターボックス—LV62

選択条件 レベル62に到達。

自分より30以上高いレベルのモンスターを倒す。  
一度以上進化をキャンセルする。

—Please Select?—

腹...壊さないよね...? (後書き)

ひよひと腰を足ですが、話が進みます。

…早く本編に入りたいなあ。

「」意見、「」感想等お待ちしております。

翻作なので、色々な意見をいただきながらよつと良くなげにこめたないと  
思っています。

## 喚ばれしモノ（前書き）

とつあえず、この話でプロローグ的な部分が終了します。  
地下迷宮での成り上がりモンスター・ライフを期待していた読者の方  
はごめんなさい。

尚、今話から多大な厨二成分を含みます。

## 換~~は~~れしモノ

結局、ミリックは進化しなかった。

進化の選択条件の中に「進化を一回キャンセルする。」といつものがあつたということは、おそらくキャンセルし続けることで選択肢が増えるだらう……と、いつのはま�建て前であり。

（単純に怖かつたんだよなあ…自分が別の存在になるつていうのが。）

（ミリックロードになつた時は、ミリックと大して変わらないしそもそもあの時は訳も分からずいつの間にかロードがついてたし。）

（まつたく…ゾン、いやリビングデッドを喰い漁つたり呪われてそうな鎧を取り込んだり、やることはどんどん人外に馴染んでるのにこんな所で人間時代の感情が足を引っ張るとはな。）

まあ、いまさら何を考えても仕方が無いのだろう。

ミリック本人（本箱?）は後悔していない事だし。

それより今、彼が考えるべき事は…

－ナイトメア・ナイトアーマーを吸収したことで属性《炎》、特殊属性《闇》を取得しました。－

— エクストラスキル『劫火』を取得しました。エクストラスキル『常闇』を取得しました。 —

— 『炎』系統の魔術が使用可能になりました。『闇』系統の魔術が使用可能になりました。 —

(つていわれてもなあ。)

文字の上で表示されても全く実感が湧かないようである。

(…まあ、使えるってんだから使ってみるか。)

(それじゃ早速…どうせひいて使つんだろう。)

— 使用魔術を選択します。 —

(うおー！？)

— 属性を選択してください。 —

(えー？…んじゃあ、炎？)

—希望する現象を想像してください。—

(現象?…あー、何かこう、火の玉とかで良いよ。)

—イメージ操作を受信しました。《炎》フレイム・キャノン系統魔術を発動します。—

(え?いや、キャノンとかじゃなくともっと小規模なファイアボーリル的な…)

次の瞬間

ミニックは、自分の意志では無く自動で大きく口（蓋？）を開いた。

その中に、紅く輝く光の粒子が集い、大きな玉を作り出す。

急速に成長した炎球の大きさは直径約1メートル、炎球の撒き散らす高温のためにミニックの周囲はゆらゆらとした陽炎に巻かれている。

(うそ――つ!え、ちょっと、ヤバいやばいやばいやばいやばいやばいやばい!—)

ミミック本体には全く熱が来ないが、彼があくまで「試し」で発動させてみた魔術はとんでもなく「ヤバい」代物だったようだ。

そして。

最終的に約2メートルまで成長した炎球は、発動させた本体の意志と裏腹に射出された。

辺りの暗闇を切り裂いて飛ぶ炎球。

暗闇の世界は一瞬だけ真昼のように照らされ。

一拍置いて、凄まじい爆音が世界に響き渡ったのだった。

／＼＼＼＼

(……ウソだろ……?)

『フレイム・キャノン』を誤射（と、こつても良からひ。）したミミックは、すぐさま着弾点に向かった。

もちろん、ミミック基準のすぐさまであり、周りから見ればじれつたい速度であつたが。

自らの放つた魔術が残した痕跡は、彼を絶句させるに余りある物だつた。

頑丈だつたはずの石の壁はクレーターの「」とく削り取られており、周辺に広がるビームで入れると一〇メートルはあるつかという巨大な破壊痕。

(…とりあえず、しばらへは魔術の練習だな。)

(そもそも、今の俺の力ってどんなもんなんだらうなあ？)

///シクは、ふと先程のドラゴンを思い出した。

(やういえば今のはのドラゴン…あつた行つたよな。何かあるのか？)

ドラゴンが去つて行つたこの広場の奥は、///シクが一度も足を踏み入れたことのないエリアだ。

(…行つてみよう。)

///シクは、ドラゴンが消えた広場の奥に触手を向けたのだった。

////

///シクが黒騎士を取り込んでよくわからん事になつてからひつうど半年。

現在///ミックは修羅場の真つ最中だった。

相変わらずの暗い迷宮（///ミック命名）の広場で、全身を白い鱗に包んだ全長約2メートルのドラゴンが暴れまわる。

相対するは高さ70センチの箱。

箱が沈黙したまま静かに触手を構えているのに對し、白いドラゴンは盛んに箱を威嚇する。

（…ふん、弱い犬ほどよく吠えるってね。）

箱…///ミックが触手を振り上げて見せると、白いドラゴンは瞬時に反応した。

翼を使つた大きなバックステップをしながら炎を吐き出す。

放たれた炎は小さな///ミックの身体を包み込もうと……

—《ダーク・プロテクション》—

///ミックの前に、周囲の暗闇から染み出すよつに現れた黒い壁が展開された。

壁に当たつた炎は、まるで壁に呑み込まれたかのように消えていく。

数秒後には黒い壁も消え去り、はつきりと怯えているドランゴンと何事も無かつたかのようなミミックが再び顔を合わせた。

(ま、わざとこだわるですか。)

# —『イグニス・ファランクス』—

次の瞬間、ミミツクの前方から現れた灼熱の熱線が空間を灼いた。狙いを過たず身体の中心を貫かれた白いドラゴンは、致命傷を負つて倒れ込む。

断末魔の絶叫を響かせるドラゴン。

その体に触手が巻きつせ、デリ「ンセマリシクの成長の糧となつたのだった。

—ホワイト・レッサー・ドリゴンの吸収でレベルが上がりました。—

—///ミックロード—↙フ〇　///ミックロード—↙フ一一

あのダークレッドのデラゴンが消えた辺りを探索した///ミックは、下の階へと続く階段を発見した。

しばらくの間はもともとの一つの階でそこに生息していた「小悪魔」<sup>ブ</sup>を捕食していたのだが、いまさらインプ<sup>1</sup>ときを何匹吸収してもレベルアップには繋がらないと悟り下へ下へと下りていったのだ。

そして見つけた理想の獲物がホワイト・レッサー・ドリゴンなのである。

確実に勝ててそこそこ良い餌となる獲物だ。

おかげで、///ミックのレベルはフ一に達した。

今現在、///ミックに勝てるモンスターは少ない。

もちろん、下へ下へと下りていけば巡り会うだらうが、///ミックはすでにレベルアップへの意欲を失いつつあった。

退屈なのである。

今は人外の身体と思考を持つ///ミックだが、その一方で人間としての思考も合わせ持つ///ミックだ。

毎日暗い迷宮でひたすら敵を捕食するだけの生活に退屈と疲労を感じていた。

（あー、暇だなー。死にたいとまでは言わないけど、何か起こんな  
いかなー。）

その願いは、叶う。

／＼＼＼＼

深い森の中にぽつりと建つた一つの小屋。

中には一人の娘。

床に描かれた複雑を極める模様の陣に立ち、歌うよつこ長い長い言葉を紡いでいく。

古来より伝わる、契約の言葉を。

全てを失う代わりにただ一つの願いを叶えるための、禁断の唄を。

歌い、紡ぐ。

敷かれた陣は光を放ち、世界が歪み始める。

歪み始めた部屋の中、朗々とした唄だけが確かに美しく響き渡る。

— 我は願いを捧ぐ —  
— 我は魂を捧ぐ —  
— 我は願いを持ちし者 —  
— 我は汝に願う者 —  
— 我の全てをゆだねよう —  
— 我の身体は汝の肉に —  
— 我の魂は汝の力に —  
— 我の願いは汝の枷に —  
— 我は汝を呼びし者 —  
— 呼びし非礼は肉で償い —  
— 請いし願いに魂を捧ごう —  
— 我は願う者 —  
— 悲劇に報いる奇跡を待つ者 —  
— どうか —

—どうか—

—我はただ、汝に縋る—

陣を中心にはがつた歪み。

その中心に、「彼」は喰ばれた……

## 喚ばれしモノ（後書き）

プロローグ最終話でした。

…いつも以上に文才の欠片もない本文に自分で絶望しています。

プロローグである「転生及び成長編」が終了し、次話からは召喚新生活編が始まります。

今までとはガラリと違うティエストの小説になりますが、主人公はやっぱり四角い彼なので見捨てないでいただけるとうれしいなあ…

## 出番い（前書き）

社怪人様、トリアグル様のアイデイアを使用させていただきました。  
ご意見（？）ありがとうございました。

ご意見、感想等これからもよろしくお願ひします。

今話は短めですが、明日から一週間程更新が困難なため投下しました。

新章のプロローグとでも思つていただければと思います。

## 出会い

突然の光に包まれた俺が次に見た光景は、久しぶりの人間だった。

銀色の長い髪を揺らし、紫色の瞳をこちらに向ける若い娘。

かなりの美人で田の保養に良さそうだが、その表情はあまり好意的とは言えないだろう。

いや、現在の俺は箱に擬態中であり、ただの箱に好意的に微笑みかけるのもどうかと思うが。

目の前の美人さんを一通り観察した俺は、周囲の把握に移る。

木造のログハウスみたいな小屋のようだ。

近くに暖炉があつて、パチパチと心地よい音を立てながら炎が踊っている。

調度品はあまり置いていないようだ。

目に入るのは簡素な椅子と机のみで、大量の書籍か資料らしき紙片が纏められていた。

床は……

よくわからん模様が一面に描かれている。

複雑怪奇な模様は、俺の足元……いや、ミミックの俺に足なんて無いけど比喩表現的な意味で……と、目の前の娘の立つ足元を中心に広がつて いるような気がする。

だから何だと言われたらそれだけだが。

ふむ、考察の結果を纏めるとだ。

「何この状況？」

「……そんな…………」

突然娘が独り言を呟いた。

なんね？

「失敗……？詠唱を間違えた？陣に狂いがあつた？……いや、詠唱は完璧だつたし、陣の狂い程度ではそこまで影響は出ないはず……」

無視すんなや。

「……へ？」

ん？

「箱が喋った？……ふう、疲れが溜まってきたかな。」

ただの箱じゃないぞー

状況がわからないなりに触手をフリフリして自己アピール。

「また?...え、本当に喋つて…?」

「え?聞こえてんの?」

「聞こえてるつて……聞こえてる、けど。」

ヒヤッホーイ!

「…?」

よひかく話が通じる相手を見つけたよひだ。

相変わらず俺こと箱からは一切音が出でいないことから念話とかそんな感じだと思われるが、そんなの関係ねえ!今度は意識して言葉を送つてみる。

・ビーも、//ミックです。よひじへ~ -

「…?…あ、えっとナスター・シャ・セインです。よひじへお願いします?」

・はいよろしく。んで?現状を説明してくれると助かるんだけどな?

「あ、はい!わかりました!」

そして、長い長い説明が始まつた。

/ / / / /

「えへ、つまり話をまとめると……すんごい強いモンスターが君と親しい村のそばに住み着いて？」

村人が束になつてもかなわないし、君にも倒せない、外部の助けも期待できず、最終手段として強そうな何かを召喚しようとしたら箱がでてきてまあびっくり。これがホントのビックリ箱……ってごめんごめん、そんなに睨まんといで〜」

「……私にとつては生死を賭けた真面目な話なんです。」

「うーん……俺はミミックにしてはそこそこ強い方だと自負しているが、俺では力になれんかね？」

一応、協力を申し出るがナスター・シャは申し訳なさそうに笑った。

「貴方の気持ちはありがたいですが……ミミックといえばランクロのモンスター。残念ながら奴にはとても……」

「そうかい。つてかDランクなのか、俺。ちなみに敵さんはどんな感じなのさ？」

「……Aランクの強敵です。」

「俺より3個も上のランクかよ。……そもそもランクって何さ？」「よし、聞いてみよ。」

「あ、ランクつていつの冒険者ギルドが発表しているモンスターの強さ、厄介さの格付けです。……奴、ホワイト・レッサー・ドリゴンは上から2番目のアランクに当たります。」

あれ？

・待て待て、ホワイト・レッサー・ドリゴンって言つたか？

「……ええ、白い鱗を纏つたドリゴンです。レッサー・ドリゴンは純粋なドリゴンに近づいていますが、それでも竜の眷族。……生半可な相手では無いですから。」

あの白蛇がそんなに高い位なのか。

・それなら力になれると思つんだが…

「え？いや、無理していただかなくとも…」

・無理……いや、呪喚される前の俺の主食つてホワイト・レッサー・ドリゴンだったんだけど…

「は？」

・うそ。

「え？///シクですよね？」

・やうだべ。正確には///シククローデだから

・だつて、まさか…」

・ とりあえず連れて行つてくれないか?別に君にも損は無いだろ? -

「それは……そうですが。」

戸惑つた顔で認める彼女。

- はい決定。それじゃあ運搬頼む。 -

「わ、わかりまし……運搬?」

… 未だに足は遅いんだよなあ。

## 田舎ごこち（後書き）

「…もうござれば貴方も////ック、モンスターでしたね。」

「…今やうへ。」

「…え、普通に会話していたけどよく考えたら凄い事なんぢゃないかと。」

「…ナリはほひ、君が召喚したからとか?」

「普通の////ックにはそもそも会話が成立するほどの知能はありますよ……」

## 契約（前書き）

何とか都合がついたため投稿します。  
多少不自然な所があつても笑つて許して下さいな。

契約

- いー天氣だねー。 -

「 …そ、 そ う だ な。 「

- 僕さー、 今ま で ずつと 真つ 暗な 中に いたから 青空が 嬉しいんだよ  
なあ。 -

「 …なる…ほど…」

- ん、 どしたの? 息上がってるよ? -

疲れた様子の同行者、 いや、 新しく出来たばかりの相棒を 気づかう  
俺。

「 …だ、 誰の…せいだと…思つてるんだッ… -

誰のせい? それはまあ…

- 僕のせいだ。 -

まあ確かに体力自慢なわけでもない女性が『テカ』い木箱をしょって森  
の中を歩けば息も上がるつてもんだけれど、

- てかナーシャちゃん、 確かに 敬語も畏まつた態度も いらないとは  
言つたけどさあ? なんか 順応早くないか? -

「貴方が……良いと言つたんだろ? …?」

「うん、だからもうなんだけどな？なんかこいつ……なんて言つんだろなあ？」

「……ただでさえ……息が、切れているのに……適当な会話を……振るなあ！」

「はつはつは。頑張れー。」

明るい日の光が差し込む昼間の森、その中を大きめな木箱を背負つて歩く女性がいた。木漏れ日を照り返す見事な銀の髪を持つ麗人だが、服装は簡素なものであり背中の木箱もあまり立派とは言い難い。何より、このような森の奥を若い女性が一人歩いている事が不自然だった。

何故このような事態が起こっているのか。

話は数時間前に遡る。

／＼＼＼＼

俺が運搬を頼んだ娘は、しばらく何か考えていたようだが再び、今度は酷く緊張した様子で話しかけてきた。

「あ、あの……少し私の話を聞いて貰います。」

「どうぞどうぞ。」

俺も久しぶりに人と話せて嬉しいことだし。

「え、あつさり承諾された?……とにかく、貴方は私が召喚の儀式を行ひ魔界から呼び出しました。」

「うん。そうみたいだな。」

魔界……魔界、ねえ?あの真っ暗な石造りの空間ってそんなに大層な場所だつたんだな。

「私が行つた儀式、召喚魔法の儀式はこの数百年使われたことのない伝説的な召喚魔法で、そのあまりの危険性に超一級禁魔法の筆頭に指定されている魔法です。」

「ほほう。何で禁術指定なのさ?」

「……単純に危険過ぎるからです。もともとこの魔法は、人間にはどうしようも無い事態が起こつた時に魔界から強力な魔獣を呼び出してその力を借りるものでした。しかし、人間の手に負えない事態に対して低級な魔獣を呼び出した所でなんの意味もありません。そこでこの魔法は、魔界にあっても非常に強大な存在の魔獣を選んで呼び出す魔法として編み出されました。普通の召喚魔法との一番の違いですね。そしてそれほどの魔獣を呼び出すのであれば、呼び出した魔獣の暴走だけは何としても防がなければなりません。……」  
そのためにこれから行う召喚魔法の儀式の第一段階が作り出されました。」

「ふうーん。あれ?でも俺ミミックだぞ?」

「それなんですが…私も動搖して尋ねていませんでした。…貴方のレベルを聞かせて頂いても？」

- 71だが。これって高いのか？ -

低いってことは…無いよな？

「…なるほど。レベル70以上の魔獸はこの世界では《魔王》クラスと呼称されます。先程のランクS～Eは魔獸」との種としての平均値、クラスというのは個体ごとの力に対しても俗称です。モンスターというのもレベル20以上の魔獸の俗称だつたりするんですね…わたしが使った召喚魔法はもともとのものを独自に改造して召喚するレベル帯を下げた代わりに必要な魔力を少なくしたものなんですね。現れる魔獸は大体65～75くらいのレベルの魔獸を考えていたんですが、成功したようですね。」

- そのようだな。んで？第一段階ってのは？ -

「…はい。第一段階では、呼び出した魔獸と直接交渉します。もともと数人で行う魔法なので、全員の全ての魔力と引き換えに一つ言うことを聞かせる魔法なんですが……この魔法は私が一人で行えるように改造したオリジナルです。いくら何でも一人でそれほどの魔力を提供する事は出来ませんから……そのかわりを私の全てであります。」

- ?と、こうと…？ -

「今の貴方は召喚魔法に縛られてその陣から出られないはずです。…私の願いである「村を守る」ことを約束して頂ければ、すぐに

陣はその効力を失います。私の肉体は食べて頂いても結構ですし、魂も好きにして頂いて構いません。魔力も残り少ないながら貴方に捧げられますし、現時点での所有する物の所有権も貴方に移ります。これで不満があれば応相談といったところですか」

「凄い覚悟だな、おい。しかし、何でまたそこまで他人の為にやれるのかねえ？」

「あー、なんだ。その村には家族でもいるのか？」

彼女は俺の質問に大きく目を見開いたが、すぐに微笑を浮かべた。終わりを待つ者の清廉な笑み。俺が微妙な態度で尋ねようとしたことを、彼女はすぐに察したようだ。

「…あの村に家族はありません。いえ、そもそも私には家族と呼べるような者がいたことはないのですが。私はかつて宮廷魔法使いなどをやっていましたね、当時の私は宮廷内の権力闘争やら陰湿な権謀術数やらに疲れきっていました。だから、逃げたんですよ。逃げて逃げて…たどり着いたのがあの村でした。あの素朴で暖かい村の人々は私の心を救ってくれたんです。…今度は私の番だ。」

そこまでを一気に話したナスター・シャは、そこでふと俺のほうを見つめた。

「貴方は不思議な魔獣ですね。…人に対しても敵対的ではなく、その心に興味を持つたりする。」

「そんな貴方だから正直に話せば、私とて命は惜しい。私は命をな

「……うつて英雄になりたいわけでも人々の為に笑つて犠牲になれる聖人なわけでもありませんよ。」

「……にやら決意を秘めた目をしたナスター・シャ。だが、同時に僅かな緊張と怯えも見て取れる。……あれ？ 僕なんか悪役っぽくないか？」

「別に女一人くらい食べたって何にも変わらないし、魔力も有り余ってるんだけど……」

「いや、でもくれるというなら貰つておこう。食べたりはしないけどね。」

「……いいだろ？ 契約は成立した。その村を守つて見せようじゃないか？」

「俺がそう言つ（念じる）と、足元の陣がふつと効力を失つたのを感じた。なる程、なくなつて初めてわかつたが確かに陣は俺を縛つていたようだ。」

「……ありがとうございます。では、私が村までお運びします。後は……お好きにしてください。」

「……何だろう、ホントに何だろう。なんかこう……悪代官にでもなった気分なんだが。私を好きにする代わりに村の年貢を軽くして下さい、みたいな？」

まあアホな事考えてないで交渉の続きをとこうか。

「あー、待つて待つて。契約は、俺がその村を守る代わりに君は全てを捧げる、だつたよな？」

「…はい。何かご不満が？」

「いや、不満とかじやなくて…君の全てって事は生かしておいて働いて貰つてもいいわけだ？」

その言葉に彼女は初めて嫌悪感の滲む視線を俺に向けた。

あれ？なんか変な事言つたか俺？ただの確認のつもりだつたんだがな。

「…構いませんが、男性、取り分け魔獸を悦ばせる術には自信があります。」

「いやいや違うから。下方面の話じゃないよ。」

「それでは私を生かして何を？」

「運搬を頼むと言つたろ？俺は世界を見て回りたい。だが、ミニックだからな、まともに移動が出来ないんだ。よつて君には俺を背負つて旅をしてもらいたい。」

そう、それが俺の密かな夢だった。せつかくの転生、せつかくの新世界、見て回れないのが悔しかったのだ。自分のいた世界とは全く異なる異世界に来た以上、旅をして回つてみたいと思つだつた。

「…その…ような事で？」

「うん。頼む。」

「本当に……？」

「それがこっちの要求だ。つてか敬語もいいよ。……それとも、それだけは嫌な事情とかあるのか？」

まだ呆けたような顔をしていたナスター・シャは、俺の質問に我に返つたようにぶんぶんと首を横に振った。

「いえ！ いえ、そんな事はありません。… 実は、私も世界を旅してみたいと思っていたので……」

「… そうか、それは良かつた。んじゃあ、ホワイト・レッサー・ドリフトン退治とこれから旅の相棒として、よろしく。」

「… こちらじゃ。改めて、ナスター・シャ・セイン、ハイエルフで、以前はこの国の城で宫廷魔法使いをしておりました。… どうぞ、よろしく！」

「… やつぱ敬語は止めてくれよ。何か堅苦しくて嫌だ。」

「しかし…」

「敬語禁止」

「わかった。それじゃあ、ホワイト・レッサー・ドリフトンの所へ向かおう。」

「何か久しぶりに食べる気がするな。楽しみだ。」

「… うして、俺とナスター・シャ・セインの奇妙な二人（？）旅が始ま

つたのだつた。

/ / / /

ナスター・シャがへばつてしばらぐ。現在の彼女は軽い足取りで森を抜けようとしていた。

-何だよ。元気じやないか？ -

「背中の重りが無くなつたからな。…自分の重さを消す魔法があるなら最初から使つてくれないか？」

-いや、忘れてたわ。 -

「…………。」

ナスター・シャは黙り込んでしまつた。そう怒るなつて。

-あ、そろそろ森も終わりみたいだぞ？ -

だんだん木がまばらになり始め、空が良くなれるよ!ひー……

-おーおー…ナーシャちゃんよ、毎晩つからキャンプファイヤーはやらないよな普通。 -

ナスター・シャが村のある方だと言つていた方角の空は、黒い煙が立

ち上っていた。どう見てもちょっとした小火という規模じゃない。

村の壊滅という規模だ。

「……そんな……」

背中越しに、悲鳴のような声が聞こえた。意識をナスター・シャに向けると蒼白な顔で食い入るように煙を見つめている。

「……だつて、あの竜はまだ村を襲つたりしないってギルドは……」

「おい、大丈夫か？」

「私は……なんのために……？」

不味い、パニックを起こしかけてるな。……まあ、よりどじろを一気に村」と失つたなんて発狂しても可笑しくない事態だらう。

……失つてそこまでショックを受ける程のものがあつて羨ましい、ところのはこの場に相応しく無い感情なんだらうな。

まあ、今はとにかく状況の把握と背中の相棒を落ち着かせることか。これから面倒と彼女の悲哀を思つた俺は、一人万感のため息をつくのであつた。

そりやー、確かに暇なのは嫌だが、こんなにんこ盛りのハプニングを押し付けられてもそれはそれでお腹一杯なんだがなあ。

## 撃退

村は、白き竜に蹂躪されていた。

炎を上げて焼け落ちる家々に、逃げ惑つ村民。

勇敢にも竜に立ち向かい、倒れた村の男達の亡骸が哀れを誘う。

誰もが必死だつた。

竜は、この世界において最強の魔獸である。

その存在は天災に等しく、出合つたならば逃げるしかない。

正確に言えば村を襲つてゐる竜は亜竜レッカーメラゴンであり、本物の竜メラゴンとは大きな差があるので、ただの村民にそのような事がわかるはずもない。

もつとも、わかつた所で村民達がすべき事は変わらないのだが。

亜竜は、竜にこそ劣るものの方の村を壊滅させるくらいの事は簡単にやつてのける。

亜竜の中でも特に強力な個体は、一頭で城塞都市を落とすことがえあるのだから。

ギャオオオオオオツ—————！

竜の発する大音響が辺りの空間をビコビコと震わせる。

もはや自分に刃向かう者が消えた事を悟つた竜は、満足げに村を徘徊し始めた。

少年は、からうじて残つた家の残骸に隠れていた。

隣には母もいるし、まだ幼い妹もいる。彼は、幼い妹を守るために家の残骸の陰となる狭い空間の入り口に立っているのだった。

少年とてまだたった10歳の子供ではあつたが、自分達を逃がすために村の男達と竜に挑んで行つた父親の背中を見ていた。

父親が戻つて来るまで自分が母と妹を守るつもりだった。

憔悴した様子の母と泣き疲れた妹は、この小さな隠れ家でぐつたりとしている。

少年は、母の元へ近付くと励ましの声を掛けた。

「母様、きっと大丈夫。父様も死なないつて約束してくれたし、僕もリエラ（妹）も母様自身も生きてるんだから。」

「…そうね。ありがとうトール。お父さんが帰つてくるまでみんなで頑張りましょうね。」

そう言って微笑み、少年トールを抱き締める母。

「うん、母様。…そうだ、それにナスター・シャ姉様がいるよー。」

自らの発見に興奮したように話すトール。

「…そう、そうよね。ナスター・シャ様がいたわ。の方なら何か出来るかもしれないわね。」

「うん！ナスター・シャ姉様なら助けてくれるよ！ナスター・シャ姉様はとっても強いから！」

「…ふふ、トールはナスター・シャ様が大好きなのね？」

こんな状況ではあつたが、息子の嬉しそうな様子に微笑む母。実際、トールはナスター・シャが大好きだつた。

四年前にフラフラの状態で村に迷い込んだナスター・シャは、村長に保護されてすぐに村に馴染んでいった。自分の過去を話したがらないために少し謎めいている所もあるが、彼女の面倒見がよい性格に子供達はすぐになつてしまつた。以来子供達には頼れる良き姉として、大人達にはその驚くような深い知識と魔法の腕で頼りにされ、今ではすっかり村の大切な一員である。

1ヶ月前、村の近くに竜が住み着くとナスター・シャは森に消えた。

自分に出来る」とするとトールに言い残して。

「…うん。ナスター・シャ姉様は好きだよ。優しいし、色々教えてくれるから。」

はにかんだ様子で母に語るトール。10歳の少年の素直な心だ。

「 わい、お母さんほ良こことだとと思つわ。」

暗い一時的な隠れ家に、初めて穏やかな空気が流れる。

「 ねえ、母様……

トールが口を開き……

唐突に口が差した。

トールの田の前に白い影が黒々と落ちる。

母は、田を見開いて彼の背後を見つめていた。

トールがゆっくりと振り向くと、そこには白い龍鱗の巨体があつた。

すぐ先に、粘着質な竜の唾液がボトボトと落ちる。

……ああ、死ぬんだな……

ただ、そう思った。

竜が身体をたわめ、口をガパリと開き……

どこからか飛んできた炎の塊に横つ面をぶん殴られた。

ギャオオオアツー！？

初めて聞く竜の動搖したような鳴き声。

グ、グギヤオオオオオオオオオツ――――――！

そして、本気で激怒した鳴き声。

だが、彼はもう竜を恐れてはいなかつた。

視線の先で風に揺れる美しい銀色。

何故か、大きな箱を背負つてはいたが……

「母様、もう大丈夫。…ナスター・シャ姉様が来たよ。」

彼女は、息子のトールほど現実を甘く見てはいなかつた。

(いくらナスター・シャ様でも一人で竜と戦えるはずがない。……でも、今の私に出来る事もない。それならせめてナスター・シャ様の応援をしよう。私達を助けてくれるように。)

その願いは…叶う。

／＼＼＼＼

今にも子供を襲おうとしているホワイト・レッサードラゴンを発見した俺は、まずは挨拶代わりに『フレイム・キャノン』をぶつ放した。フフフフ、ナスター・シャも驚いてるようだな。やべつ、結構楽しい。

「…おい、今のはなんだ？」

「ん？炎属性魔術だが。 -  
フレイム・キャノン

「魔術使えるのか？」

「うん。…でも、魔界で使いつゝ威力が下がった気がするな。 -

鈍つたかな？

「…いや、魔術というのは原始的な技術だからな、周辺の魔力によつて威力のブレが激しい。その分、完全に制御された魔法より感覚的に使えるし高い時の威力も上なんだが…それに、私が召喚して契約していることで貴方自身の力も多少落ちているんだ。」

ふうん。そういうものなのか。

「ヒヒ、エリザベスの敵をなんがお怒りのよつだ。」

「すまない、えつと……」

- ああ、悪いね。俺には今の所名前が無いんだ。……ん、せつかくだからナーシャちゃんにつけでもらつか。俺の名前何がいいと思つ？ -

- 「今はそんな事を話してこの場合ではなこと思つが……シーラウチに来るがー。」

- 全く……落ち着いて召喚使いをやめさせやいよ。 -

- 『グラビティ・ネスト』 -

ギヤオオオアアツー！？

「ついに飛びかかる！」としたホワイト・レッサー・ドランゴン属性魔術を発動した。

足元に発生した重力場に足を取られてたたらを躊躇むドランゴン。

… やつぱつしょぼこな、あいつ。

「…確かに負ける気がしないな。貴方と僕の間では全くまともな抵抗すら出来る気がしなかったのにな…」

「まあ、俺だつて本物の竜には勝てないよ。でも、ドラゴンヒーラー サードラゴンには圧倒的な差があるからな。」

さて、せっかくだからさしつと終わらせるか。

『フレイム・キャノン』  
『フレイム・キャノン』  
『フレイム・キャノン』  
『フレイム・キャノン』  
『フレイム・キャノン』  
『フレイム・キャノン』  
『フレイム・キャノン』

「……なんだかあの竜が可哀想になってきたな。」

ホワイト・レスサークル、ボロボロになつて地面に転がつてい  
た。

まあ、当然だろ？。『フレイム・キャノン』の5連射で元気だった  
ら俺がビisor。

「さて、ナーシャちやんや。俺をあの竜に投げつけてくれ。」

「え？あ、ああ、わかった。」

背中の俺を降ろし、振りかぶるナスター・シャ。

現在//://は重さ、ゼロ

こつして俺は、ホワイト・レッサーダラゴンを美味しい頂いたのだった。

……ま、味なんてわからんけどね。

## 撃退（後書き）

以上で宝箱転生記本編を終了します。

少々強引な終わり方で申し訳ないのですが…

この後一話だけエピローグを投稿して完結です。

この作品はあくまで習作なため、続いて正式な作品を新たに書き始める予定です。

次回作品も人外転生モノにする予定ですが、転生先を募集します。…と、いうか知恵を貸して下さい。

今の所、

再び//ミック（続編ではない）

意外に少ない鎧系（ドクエのさまよう鎧とか）

ゴーストとか、霊体系（精霊とかもアリかも）と、いつた所を考えていますが…

協力いただける方は、作者インテグラルへのメッセージか宝箱転生記の感想欄へ清き一票を！……ではなく、ご意見をよろしくお願いします。

本作を気に入ってくれていた皆様、次作は本作での実験、経験をもとにより読みやすいようにしていくつもりですので、これからもインテグラルをよろしくお願いします。

エピローグ

「なあ、ナーシャちゃんよ？本当にいいのか？」

「いいんだ。」確かに少し惜しい気もするけど、私は私の道を行く。  
さ。

-ひゅーひゅー！かつこいいー！

「……茶化さないでくれないか？」

いや、ナーシャちゃんってからかいやすいんだよね。

俺がホワイト・レッサードラゴンを美味しく頂いた後。

ナスター・シャは村人達を集め、癒やし、村の復興に取りかかった。

彼女からは村の復興にある程度目処が着くまで留まりたいとの要望があつたため、村には3ヶ月ほど逗留した。

生き残つた村の男達に混じつて触手で資材を運んでいたらいつの間にか村の中にはすっかり馴染んでしまい、ナスター・シャに背負われていないと子供達が寄つてくる。

シクたる俺を恐れる村民は皆無だった。

ナスター・シャ様が連れて来たなら大丈夫だそうだ。

……もはや信仰レベルじゃないか？

まあいい、とにかくそんな俺の協力もあつて村の復興は順調に進んだ。

破壊されていない家が数軒残っていたことと、村はずれに固まっていた畠や農地は無事であった事があり、時間はかかるが元の生活を取り戻せるだろう。

村に新しい家が五軒建つた日の深夜、ナスター・シャは俺を背負つて村を出た。

もう村は大丈夫、次は貴方との約束を果たす番だと笑う彼女に村に逗留する時間の延長を提案したが、受け入れなかつた。

おそらく、彼女なりのけじめをつけたのだと思つている。

現在俺はナスター・シャの背に揺られて夜空の下を進んでいる。

背中越しの彼女の足取りに迷いは無い。

……またいつか、顔をだそうな？

なんだかんだいって俺自身もあの村を気に入つてしまつた。

「そうだな。またいつか、だ。」

「ああ、またいつかな。」

そこじでふと足を止めたナスター・シャは、振り返ると少ししんみりした空気を吹き飛ばすよつに笑顔を浮かべた。

「さあ、まずはどこに向かおうか?」

いつの間にか昇り始めた太陽が、村から上がる炊事の煙を浮かび上がらせる。

かつての黒煙とは真逆の、再生を表す煙だった。

Fin

## ヒューローク（後書き）

皆さんの意見の多さから、次作もハリハリシクになります。『』意見、『』感想等まだまだ受け付けておりますのでよろしくお願いします。

最終話は頑張つていい話風にしてみたんですが、……疲れた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9359z/>

(習作) 宝箱転生記～ミミックの生態～

2012年1月8日23時03分発行